41 亀井南冥著『病因備考』について
（特に後藤艮山著『病因考』との関連）

木下　勤

筑前福岡が生んだ江戸時代中期の儒医・亀井南冥は、後世儒者としてすこぶる高名であるが、当時「肥に椿寿（村井琴山）あり、筑に南冥あり」と並び称せられた程の名医でもあった。南冥は始め吉益東洞に入門するが日ならずして去り、大坂の永富独嘯庵に師事した。そして後藤艮山の学識を称揚し、その学術に共鳴したが、吉益東洞の学術は排斥した。

南冥が『病因備考』を著したのは、安永七年（一七七八）三十六歳の時である。なお、その年の五月八日付で福岡藩に一介の町医から儒医兼帯として抜擢され、第七代福岡藩主・治之（養子で将軍徳川家治の従兄弟、一橋宗尹の第四子）に仕えた。因に藩主治之は、その三年後の天明元年（一七八一）、今で謂う脚気衝心のために死去する（享年三十歳）が、この時の最後の主治医は新参にもかかわらず南冥が務めている。

『病因備考』は、題名の如く後藤艮山著『病因考』に備えるの書で、今日写本でのみ伝わり版本は見当たらない。南冥自身の跋文によれば、

「それ医は小伎芸術なりといえども枢機あり、唯だ能く意解すべくして、言を以てこれを諭うべからず。況や浅筆に於ておや。然れども今この「考」を作す者は、徒だ新進年少の為に僅かにその由る所を示すのみ。若し能くその徑蹊を獲て、勇往進取起乗して上れる者は、是れ余の門客に望む所なり。故に塾生を除くの外、また此の冊子を授くるを許さず云々」

とあり、上版されなかったのは南冥の、このような意図によるものであろうと安西安周先生は、その著『日本儒医研究』で述べている。

福岡藩主治之の主な死因であった「脚気」について『病因備考』並びに『病因考』の記述を見てみよう。

『病因備考』には、

「備考に曰く、脚気は骨節を凝結して痛み且つ腫れるも

のなり。腫れ易きものは治しやすし。六物解毒よろしく長くこれを服さしむべし。若し脛あるいは髀にあるものは反って得がたし。未だその理の如何なるかを知らず。「病因考」の説これに反す。親しく諸物に試みる者、自ら当にその説の当否を知るべきなり。その腫満なる者は、治方已に水腫の條下に示（見）したり」とある。

『病因考』には、

「此古名二緩風一、方書ニ謂ウ所ノ風毒脚気也、此足内外ノ踝骨或膝賓ニ寒湿聚テナスモノヲ湿脚気トナシ、腫レザルモノヲ乾脚気トナス。トカク骨節ニ凝聚スル也。千金方外臺ニ風毒脚気ト云ルハ当病也。宋元以来イフトコロノ脚気ハ当病ニアラズ。実ハ疝気也。疝ノ足ヘ流レタルカ脚気ナリ。

治方　温泉　続命湯　云々」とある。

なお、『病因備考』の写本について私の知る範囲では、九州大学医学図書館、福岡県立図書館および下関市立長府図書館に蔵本されているようであるので、聊か比較検討してみたい。また、亀井南冥の肖像画が、複製ながら唯一、福岡市能古博物館に所蔵されているので、ご参考までに紹介申し上げたい。

（温知堂木下クリニック）